

## ポスター番号8

## 実践発表

## 高校における JSL カリキュラムの試み

## —数学A・保健・英語と連動させて—

小川郁子、坂本昌代（東京都立高等学校講師）

## 1. 実践の背景

日本語の困難度が高い教科で「取り出し指導」が行われている高校も多く、筆者たちも国語総合(1、2年)、現代社会(1年)、世界史A(2年)の取り出し授業を担当している。その経験から、生徒たちの日本語力に配慮して教科内容を精選して扱えば、十分に高校生としての教科の学びが可能であることを実感している。

教科の学びに必要な日本語力は、やはり教科と日本語の統合学習を通して獲得できると考える。そこで、「取り出し指導」がない教科については、日本語学習の側から教科にアプローチし、高校でも JSL カリキュラムの考え方による学習に取り組んだ。

## 2. 実践の場と学習者の状況

筆者らの勤務校は三部制定時制高校である。滞日期間が短い生徒たちは、5教科入試の全日制をあきらめ、3教科入試の定時制に集中する傾向がある。本高等学校には、1学年で在籍数の1割弱の生徒が、日本語力が不十分で取り出し指導の対象になっている。

今回の実践は、夏休みとその前後、2学期以降に実施した日本語補習での取り組みである。学習者は午前部・午後部・夜間部合わせて1年22名、2年13名の取り出し生徒の自由参加で、3～13人であった。2学期以降の補習は1年午前部の生徒を対象に2～6人で実施した。出身国は、中国、フィリピン、ネパール、インド。滞日期間は夏休み時点で1年～4年半程度である。

## 3. 具体的な実践の内容とその成果と課題

夏休み時期の日本語補習(45分×3)×7回、全21コマのうちの半分、2学期の日本語補習(45分×2)×15回で、全30コマのうち7コマをJSL教科学習に当てた。

## 3. 1. 英語の実践、成果と課題(坂本)

読解、文法学習、英文和訳の3つを行った。教科書の本文を日本語訳し、日本語の読解教材として学習した。受け身については、日本語の受け身を学習した後、英文和訳の練習をした。英語の現在完了形については、日本語訳するとどういった表現になるかを学習した。

使用している教科書は決して難しいものではない。しかし、英語の学習歴には大きな差があり、一定の英語力がある生徒については対応する日本語文法を学習することで理解を深められたが、英語力が不十分な生徒については時間内で苦手意識を克服するには至らず、課題が残った。

## 3. 2. 数学Aの実践、成果と課題(小川)

数学Aの内容は中学校2年生の「確率」の単元を少し進めた程度である。教材は在籍授業で教科書と照合できるように、教科書の拡大コピーに、ルビを振り、難しい語彙に英/中国語訳や補足説明を入れ、理解を助ける図解を加えた。一緒に丁寧にテキストを読み、練習問題を解いた。

日本語力と数学の学力は別問題である。練習問題が難しくなるにつれ、「日本語はわかったが、数学の答えはわからない」という生徒が出てきた。すると、理解できた生徒が母語で説明をし始め、中国語とタガログ語の各グループでの教え合い活動で全員が正解できた。

言葉を丁寧に補充したり、母語で学び合える環境があれば、どの生徒も十分に数学Aを理解し、

数学を通じて日本語の学びにもつながることがわかった。

### 3. 3. 保健の実践、成果と課題 (小川)

保健の学習内容は、栄養、睡眠、運動、喫煙など、日常生活に必要な知識であり、中学校の保健や家庭科とも重複している。ただし、教科書の語彙は難しいため、在籍授業のために、英/中国語の語彙対訳表を作成して配付した。補習では、内容を精選してワークシートを作成し、基礎知識は、中学校家庭科の教科書から補充した。

生徒たちは協力して、①必要な情報を教科書から読み取る、②ネットで情報を検索する、③日本語の文型を意識して発表する、④実生活を振り返って話し合う、などの学習活動を行った。

栄養の単元で生徒たちの食生活の実態に合わせ、みんながコンビニ、ファストフードでよく買う食べ物は、どんな栄養素が摂取できるか、それで不足する栄養は何で、どうすれば補充できるか、実践的・発展的に楽しく学んだ。

日本語や日本の生活体験にもかなり差があったが、学習を通じて情報交換し語彙を増やした。保健は日常生活に必要な内容で、日本語の学習教材として活用していきたいと考えている。

## 4. 成果と課題

### 4. 1. 高校JSLの可能性

高校の教科書は語彙が難解だが、基本をおさえるなら日本語との統合学習は十分にできるという見通しが立った。筆者たちは、中学校JSL、高校国語JSLに取り組んできた経験があり、高校JSLに近い立場にあったが、今後は、そのノウハウを関係者に伝えていくことが必要だろう。

### 4. 2. 生徒たちへの意識づけ

今回は2学期の単元の一部だけを扱ったが、2学期の最後に生徒に行ったアンケートでは、熱心に授業に取り組む生徒ほど、在籍学級の教科授業がわかりやすくなったという反応があった。

しかし、配付資料を使っていないなど、この学習を生徒たちが自覚的に在籍学級の授業とどうつなげて学びに生かすかについて、生徒たちへの具体的説明が十分ではなかったと反省した。

### 4. 3. 学び合いの効果

日本語学習はレベル別にしたが、教科のJSLは参加生徒全員で行った。日本語力や、日本の生活事情についての知識の差、教科の学力差がかなりあったが、よく知っている者が率先して説明し、相互に自主的に補って学び合いを活発に展開させることができた。在籍学級の授業とは異なり、支援者側が教科のすべてを教員に代わって教える必要はないのだということにも気づいた。

### 4. 4. 教員との連携、関係者の理解

今回、教科担当の教員と生徒たちの様子や学習の困難さについて話し、教科書を借りて進度を尋ねることから始めた。終了後は、補習用ワークシートを渡して、彼らの学びを支える支援方法に気づいてもらう一助とした。教科に関わる学習のおかげで、教員との連携のきっかけが作れた。

しかし、期末考査の問題は、抽象的で難解な長文問題で、特に非漢字圏の生徒は歯が立たなかったと感じる。学びの成果が定期考査にも反映できるような連携を今後は考えていきたい。

高校関係者の中で、文科省JSLカリキュラムについて知っている者はまだ少ない。こうした試みを積み重ね、交流を広げることで、高校での日本語学習と学習支援の連携について、関係者全体に理解を広げていきたいと考えている。